

幼児教育史学会会報 第17号 Web 版

目次

第9回大会報告

研究発表・シンポジウム・総会・プレ企画・ポスト企画

総会報告

大会開催を終えて……………村知稔三

大会参加記……………大川なつか・大須賀隆子・中西和子・
畠山祥正・早田由美子

会員研究情報：私がイタリア幼児教育史研究に至るまで……………オムリ慶子

新入会員

寄贈図書

事務局からのお知らせ

【第9回大会報告】

2013年11月30日(土)、青山学院女子短大で幼児教育史学会第9回大会が開催され、宍戸健夫会長の開会挨拶のあと、研究発表・シンポジウム・総会が行なわれました。また、29日(金)にはプレ企画が、12月1日(日)にはポスト企画がもたれました。それぞれの詳細は以下のとおりです。

研究発表

司会：早田由美子(夙川学院短大)、松島のり子(お茶の水女子大学)

(1) 関口博子(同朋大学)「18世紀後半のドイツにおける子どもの歌の創始—J. A. ヒラー『子どものための歌曲集』(1769)の分析を通して—」／コメント：勝山吉章(福岡大学)

(2) 日暮トモ子(有明教育芸術短大)「近代中国におけるモンテッソーリ教育法の受容に関する考察」／コメント：一見真理子(国立教育政策研究所)

(3) 浅野俊和(中部学院大学)「三木安正の保育論—日中戦争・太平洋戦争期を中心に—」／コメント：吉長真子(福山市立大学)

(4) 大須賀隆子(帝京科学大学)「『大地保育』における創造美育の受容と展開—創造美育の乳幼児教育における意義について—」／コメント：太田素子(和光大学)

シンポジウム「諸外国における保育制度改革の歴史的検討」

司会：高田文子(白梅学園大学)

提案

- (1) 梶瑞希子(聖徳大学)「イギリスの保育制度改革ーChildrens・センター事業を中心にー」
- (2) 松川由紀子(中部大学)「ニュージーランドの保育制度改革について」
- (3) 村知稔三(青山学院女子短大)「3つのロシアと保育制度の変遷」

指定討論：小玉亮子(お茶の水女子大学)

第9回総会報告

報告事項

- I 第8回大会年度(2012/13年度)事業報告
 - 1) 会報15号・16号の発行(村知事務局長)
 - 2) 機関誌『幼児教育史研究』第8号の発行(小玉編集委員長)
 - 3) 共同研究の検討(阿部理事)
 - 4) 第9回大会の実施(村知事務局長)
 - 5) その他：幼児教育史学会における研究の倫理に関わる問題について(太田副会長)
- II 第8回大会年度(2012/13年度)決算報告・監査報告(別府理事) 略
- III 第9回大会年度(2013/14年度)事業案
 - 1) 会報17号・18号の発行(村知事務局長)
 - 2) 機関誌『幼児教育史研究』第9号の発行(次期は勝山編集委員長、小玉副編集委員長)
 - 3) 共同研究の検討(阿部理事)
 - 4) 第10回大会の実施：2014年12月6日(土)、お茶の水女子大学
 - 5) その他
- IV 第9回大会年度(2013/14年度)予算案(別府理事) 略
- V 第10回研究大会会場校の挨拶(小玉理事)

プレ企画

- (1) 青山学院資料センター見学
- (2) 青山学院幼稚園見学
- (3) 青山学院女子短大図書館の特別図書の間覧

ポスト企画：海外の幼児教育史の研究動向を愉しみながらフォローする会

司会：塩崎美穂(尚敬大学短大部)

- (1) 青木美智子(ドイツ教育学研究者)「ドイツにおける『幼稚園』の歴史ーヴィルマ・アーデン=グロスマン『幼稚園』を読むー」
- (2) 中村早苗(青山学院資料センター)「米国メソジスト監督教会女性海外伝道協会の教育活動ー海岸女学校・デイ・スクール・日曜学校ー」

第9回大会開催を終えて

幼児教育史学会第9回大会は例年より1週早い11月末日に青山学院女子短大で開かれ、皆様のご参加とご協力が無事に終えることができました。心よりお礼を申し上げます。

大会準備には、学院に現在、関係する阿部真美子・中村早苗・杉本真由美・村知稔三の各会員が4月から携わりました。このうち阿部会員は第4回大会を開いた経験があるので、準備は比較的順調に進みました。それでも当日には行き届かない点が多かったかと思えます。お許してください。

今大会ではプログラムにあるようなプレ企画を前日に設けるとともに、例年、大会翌日にもたれる研究会をポスト企画として位置づけました。

参加者は大会に58名（うち非会員11名）、3つのプレ企画にそれぞれ6～10名、ポスト企画に24名でした。

研究発表では内容のいっそうの充実を図るためにコメント方式を採用しました。その詳細や感想については後掲の参加記をご覧ください。9月初めの発表申し込みから大会までの限られた日程のなかで、新しい取り組みにご協力をいただいた発表者とコメントーターの皆様へ感謝を申し上げます。大会アンケートのなかでもこの方式には好意的な評価が多く寄せられました。

シンポジウムでは、学会創設10周年を視野においた共同研究の一環として、保育制度の比較史的考察を試みました。結果的にヨーロッパの大陸国や北米諸国に関する提案はありませんでしたが、よく準備された3つの提案と、その論点を的確に整理したコメントとがあり、問題の見通しを共有できたかと思えます。

プレ企画とポスト企画にも積極的な評価をいただきました。特に後者は大会の一環としての位置づけをよりはっきりさせたこともあり、例年より多くの参加者を得ることができました。これらの企画にご尽力いただいた方々にお礼を申し上げます。

次回の第10回大会は、小玉理事が中心になり、2014年12月6日にお茶の水女子大学で開催される予定です。記念大会にふさわしいものとなるよう、会員の皆様がいっそうのご協力をお願いいたします。

(文責・村知稔三)

【大会参加記】

(1) 大川なつか(立正大学非常勤講師)

今大会は他の研究会と重なっていたため、シンポジウムとポスト企画に参加した。

シンポジウムでは3つの提案をもとに、指定討論者である小玉亮子会員が論点を整理し、比較・検討を行なった。興味深かったのは、それぞれの国が抱える特有の事情とそれに応えようとする保育制度の在り方が明らかになった点と、我が国の保育制度改革を考えるうえで諸外国の事例を含めた歴史的検討の果たす役割の重要性を改めて認識した点である。

ポスト企画は会議室いっぱい多くの会員が集まり、和やかな雰囲気の中で行なわれた。青木氏の発表では時代ごとに変化するドイツ社会と就学前教育との関係性が詳細に示され、勉強になった。また中村会員の発表は貴重な資料の中から歴史を丁寧に掘り起こす報告で、

当時の様子が如実に伝わってきた。

懇親会では、貴重なご意見を様々に頂戴し、また若い会員からも大いに刺激を受けた。振り返ってみると、充実した発表内容、それを支える精緻な研究手法など自戒の念に堪えない。そのような意味で本大会は私の今後の研究の方向性を押し広げる原動力となった。

(2) 大須賀隆子(帝京科学大学)

「『大地保育』における創造美育の受容と展開」という題目で発表した。本大会は「『同一会場で全参加者が同じ発表を聞く』という従来のスタイルを維持し、さらに、質疑の時間不足を改善する試みとして、一人当たり発表25分、質疑20分、質疑の最初に『コメント的な長目の発言』を準備委員会から適切な会員に依頼する」とのことであった。この至れり尽くせりの指導システムと研究発表方式に私は惹きつけられた。なぜなら、現在取り組んでいる研究内容には歴史研究が必要なのだが、これまで私は歴史研究の正式なトレーニングを受けたことがなかったからである。「日暮れて道遠し」の現状を打破するためにも、本大会発表に応募することにした。お陰で予想を超える学びの深まりと広がりを得ることができた。

発表後にコメントをしてくださった太田会員は、本研究の対象園である大地保育の野中保育園に実習巡回で足を運ばれたことがあり、大地保育創始者の故塩川豊子氏とも言葉を交わされたことがあるとのことだ。

そのコメントのひとつが、私の研究内容が学際的であるとのことご指摘であった。幼児教育と臨床心理学の重なる領域として子どもの自由画を研究対象にしているというのがそれに当たる。そして、日本の保育者が子どもの自由画を「心の言葉」として見つめようとした時代が戦後の1950年代から1960年代であった。その時代に、保育者が解釈した子どもの自由画の意味を保護者はどのように受け取ったのだろうか。保護者の受け取り方についての聞き取り調査をすれば、歴史研究として成立するとの指摘を太田会員からいただいた。早速、1960年代以降から今日に至るまで保母として自由画指導に取り組んできた塩川寿々子氏に保護者の聞き取り調査をお願いして、その返事を待っているところである。

(3) 中西和子(日本児童教育専門学校)

本大会には、プレ企画の青山学院幼稚園見学、研究発表、ポスト企画と、飛び飛びの出席であったが、その中で気づいたことを書き留める。

研究発表は4つの時代、3か国に亘り、細やかな各研究に対し、コメンテーターからの発言があり、発表された内容の位置付けがより鮮明になる感があった。掘り起こされた当時の「トライ」である歴史的事実の意味を問いたいところだが、世界と時間軸の大きな枠取りの無い我が身が残念であった。

シンポジウムのテーマは「諸外国における保育制度改革の歴史的検討」であり、プログラムに掲載された3会員の提案を、日本で進行中の子ども・子育て新制度を考える上での格好の素材として受け取った。イギリス、ニュージーランド、ロシアにはそれぞれの歴史・経緯があり、現状打破の決定打をどの程度のコンセンサスを得て実行したのか、大きな実験の結果を見る思いであった。日本の新制度は社会福祉政策で、内閣官房・内閣府・総務省・財務省・厚生労働省による政府広報レベルでは文部科学省の見解は見えない。子ども・子育て支援は教育抜きなのだろうか。3か国の保育制度の変遷に、教育・福祉に二元化されていた保育制度が教育の名の下に統合、多様な保育機関が教育省の管轄化に一元化、保育施設の社会的位置

づけとして就学前教育機関の側面を強化等の文言を見、各国の歴史的背景を踏まえた分析に興味を掻き立てられた。やむなく欠席したことが悔やまれる。

プレ企画で見学した幼稚園では「幼児期からの教育を重視する歴史を背景に青山学院の一貫教育の中で運営」されていることを教えて頂き、日本の多様な保育の一面を改めて勉強した。

(4) 畠山祥正(郡山女子大学短大部)

本大会は密度の濃い学びの連続でした。

研究発表は発表30分、質疑15分なのでじっくり聞くことができますが、今回は特に発表毎にコメンテーターが指定され、事前に質問を発表者に伝達した上で発表に臨んでもらうという方法がとられました。この方式は、発表内容が事前にしっかり固まっている必要がありますし、研究領域の近いコメンテーターが得られるかどうかも課題でしょうが、問題の背景などをじっくり学びました。

研究はどうしても限られた領域での成果になりますが、問題の背景は別の研究をする場合でも重要です。たとえば、幼稚園だけを見ても同時代の親や子どもたち全体の状況はつかみきれません。自分の研究と一見無関係に見えることから広く学ぶことこそ、この学会が大切にしてきたことではないかと思っています。

会報15号(2013年3月)の「会員研究情報」に私自身の学びの歴史について書きましたが、若い日にルソー、ペスタロッチー、フレーベルと続く教育思想と理論を学びながら、そうした論が当時の状況へのアンチテーゼであったことに気づくまで思わぬ時間を費やしました。幼稚園は当時普及していた幼児学校と異なるものとして登場したのです。その後は社会史の成果を宮澤康人会員が書かれたものから学びましたが、「ルソーによる子どもの発見」でよくなったのではなく、子どもを尊重する流れは少数派であり続けました。歴史的に見ることが現状の理解に役立ちます。

今回のシンポジウムは、イギリス、ニュージーランド、ロシアの保育事情の変遷について、指定討論者が論点を見事に整理され圧巻でしたが、それぞれ観点が異なる研究からどう学べるかという方法論を示されたとも思いました。

ポスト企画の研究会は2件とも私のテーマに近い発表でした。

まず、青木さんがドイツ幼児教育史の原書からポイントを整理して概説して下さいました。フレーベルの幼稚園に関連する内容の多くはほぼ知っているものですが、その後の流れ全体を通して見ることができました。ただ、参加者の質問から近代ドイツの事情が周知されていないことがわかりました。実はフレーベルのキリスト教をテーマとしてきた私も試行錯誤で学んだのですが、プロイセンが力によってドイツを統一していくまでドイツという国はなく、多数の領邦が並立する体制でした。近代国家として遅れたのもこの事情からです。ナポレオンは分断されたドイツにドイツ人の意識を与えた人といえるかもしれません。プロイセンによる幼稚園禁令のタイミングも領邦による支配関係の変化に関係しています。この点については歴史地図を見ていただいた方が早いので、ドイツのことがよくわかる文献を紹介しておきます。*Putzger Historischer Weltatlas*, Cornelsen Verlag, Berlin. 4215円(日本語版:『プッツガー歴史地図 日本語版』帝国書院、2013年、9975円)。ほかに『カラー世界史百科』増補版(平凡社、1985年)もよいのですが、現在は品切れのため、古本の利用になります。

それと、旧東独地域での保育施設が朝6時から開かれていることに半信半疑の反応がありました。でもドイツ人は朝が早いのです。早く仕事を始めれば、午後4時頃には退勤です。私は

1994年度に一年間ベルリンに滞在しましたが、夕方前に通勤者でバスが込み合っている状況をそう理解しました。早く仕事に行く親は子どもを早く預けることもできるし、遅く引き取る親もいる。そんなふうに見れば不思議ではないと思います。

2人目の発表者は中村会員で、青山学院の歴史についてでした。私は前大会でキリスト教主義学校の幼稚園保母養成について関西地区を中心に発表しましたが、関東の動きとどう関係していたのかという課題を残していました。今回、青山学院やその幼稚園の初期の場所が火災や地震によって築地居留地(現在の聖路加病院～タワーの一画)と青山等を行き来した経緯を学びました。青山学院の学校変遷図はWebにあります。その学校や幼稚園がある時期どこにあったのか、一つひとつ確かめる必要があると学びました。築地居留地には欧米の公館や教会・宣教師館・学校が建てられていました。居留地の詳細を記載した地図はたまたま購入していた『図表で見る江戸・東京の世界』(江戸東京博物館、1998年)の60～61ページに、明治10年代後半の頃の居留地1～52番地までの位置と利用した学校や住民の名が細かく記載されています。

参加者の大きな関心は婦人宣教師の立場についてでした。教育の専門家である彼女たちはキリスト教伝道のために派遣されたのですが、その役割は子どもや教育の範囲に限定されていました。日本についてほとんど何も知らずに派遣された独身の彼女たちが活動するには、先輩宣教師や日本人信徒の協力が不可欠でした。組織よりも人の関係を追うなど、地道な研究が必要とされる分野であることを改めて思ったしだいです。

昼食の後、前日に小林恵子会員からいただいた資料を手に、松野クララの記念碑を2名の方と青山霊園に訪ねました。中央通りから「西五番通り」を入れて進むと右手にあります。外人墓地の比較的わかりやすい一画です。なお、Webで「松野クララ」を検索すると、外人墓地の詳細や、「日独交流の群像」として記念碑の写真入りで詳しく載っていました。

(5) 早田由美子(夙川学院短大)

本大会が、心地よく、美しく、オシャレなデザインあふれる青山の中心地に位置する学院で、これまでと同様、平穩に実施されたことは、なにより嬉しいことでした。今回は4発表に対して、それぞれ事前にお問い合わせしたコメンテーターからコメントをいただくという新機軸が導入されました。それによって発表後の短い間にたくさんの論点が整理されて示され、充実した会になったと思います。ただ、フロアからの意見や質問を頂く時間が若干少なくなってしまう、司会者としてこの点を反省しております。

東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故で日本の情勢が大きく変わってしまった今日、これから生きる子ども達にどのような未来が待っているのか、いつときも心から離れることはありません。

チェルノブイリでは事故後3年目から健康被害が目に見え始め、5年目により顕著になりました。そして、被害は長く今日まで引き継がれています。悲しいことに日本の被害はそれより早く始まっているようです。予想されている今後の健康被害増大と人口減少の中で、日本人はどのように次世代を守り、育てていけるのか。目に見えにくいのが確実に進行しつつあるかつてない事態の中で、子どもの未来が少しでも希望に満ちたものとなるよう、人類の英知を結集して立ち向かわなければなりません。

豊かさを追い求め続けた戦後の総決算がこの事態であるとする、歴史を学ぶことによって、今を位置づけ、未来を見通す作業が急務です。そして、子どもや人間にとって真の幸せ

が何かを再度見直す必要があります。子どもの未来に資するような歴史研究であることを肝に銘じたいと思います。

来年もみなさまと元気で会いできることを祈念して！

【会員研究情報】

私がイタリア幼児教育史研究に至るまで

オムリ慶子(関西学院大学)

私がイタリア幼児教育史に取り組むようになったきっかけは、高校の時から世界史が好きで、特にイタリア・ルネサンスに興味があったことに始まります。フィレンツェに身を置いて文化財を見て回りたいというくらいの気持ちで、大学卒業後イタリアに留学しました。フィレンツェ大学の語学コースには、週末に近隣の町の文化財を見て歩くという日帰り旅行があり、その説明はフィレンツェ大学の美術史の先生がしてくださるというものでした。

その後、ペルージャの国際モンテッソーリセンター附設の「子どもの家」を見学するつもりで訪問したところから、私のモンテッソーリ教育の勉強が始まりました。このセンターは、国際モンテッソーリ教師養成校としてモンテッソーリが立ち上げ、その後の運営をマリア・アントニエッタ・パオリーニ先生に任されたと聞いていますが、パオリーニ先生はパステル画の雰囲気を持ったとても優雅な先生で、確固たるミッションを持ってモンテッソーリ教育に生涯を捧げておられるのを感じました。

モンテッソーリ・メソッドについて勉強を進める中で、なぜモンテッソーリは言語教育にこんなにも力を入れているのだろうかという疑問がわいてきました。言語教育についての膨大な教具、そして固定された提示の仕方(方法論)が奇異なものに思えてきました。ここまでしなくても幼児は生活の中で自然に言葉を学ぶのではないかと。そして、モンテッソーリ以外のイタリアの他の幼児教育メソッドにも目を向けると、どの幼児教育でも読み書きや話し言葉を問わず言語教育を強調しているのが見えてきました。

イタリアは昔からヨーロッパの中でも非識字率が高い国なので、最初は単に識字率の向上のためだと考えていました。しかし、イタリア言語史を読むうちに、イタリア語という言語に特殊な成り立ちがあることが分かってきました。高校の歴史の時間にダンテ(1265-1321年)の『神曲』がイタリア語の母体となったことを学びましたが、私はその頃、イタリア・ルネサンスの中心だったフィレンツェの言葉が近隣地域に広がって行き、イタリア半島にイタリア語として自然に根付いていったのだと考えていました。ところがそうではありませんでした。

トスカーナ大公国、ミラノ公国、ヴェネツィア共和国等の都市国家に分かれ外国の支配に脅かされていた国々に、外国勢力から独立しイタリアを統一しようとするリソルジメント運動が高まっていますが、その時イタリア人として国民を一つに結びつけるために採られた政策が、ダンテ時代のフィレンツェ語を共通語としていくものでした。当時それぞれの都市国家で話されていた言葉は、方言という生易しいものではなく、イタリア語とは言語体系の違う「地方言語」でした。時代とともにダンテの時代のフィレンツェ語は死語となっており、それを生きた言葉として復活させ、イタリア全土に広めるのが統一イタリア国家の大プロジ

ェクトとなりました。

イタリア語とは何かという論争はダンテの時代からあり、現在のグラムシに至るまでイタリアの知識人であれば一度は論じていると思われます。ルネサンス初期に一都市で話されていた死語となった言語を、500年後に蘇らせるのは想像を絶する困難を極めたようで、イタリアの言語学者によると、イタリア語がイタリア全土に普及したのはごく最近の1970年代だと言うのです。

このような特殊な言語環境をもったイタリアで、モンテッソーリ・メソッドだけでなく、すべてのメソッドで言語教育が強調されたのは不思議ではないと思われます。言語学者によると、イタリア語の普及に貢献したものに小学校以上の学校教育、国内移民、徴兵制、マスメディア等をあげていますが、効果的なメソッドを持つ幼児教育にこそ言語統一への貢献があったという仮定を立て、現在もイタリア幼児教育史の研究に取り組んでいます。

【新入会員】

省略

【寄贈図書】

○近藤薫樹・近藤幹生編著『挑まぬものに発達なしー近しげ先生の子育て人間論』新版(フリーダム/発売:かもがわ出版、2013年)。248ページ、1890円。

○勅使千鶴・亀谷和史・東内瑠里子編著『「知的な育ち」を形成する保育実践ー海卓子、畑谷光代、高瀬慶子に学ぶ』(新読書社、2013年)。270ページ、2310円。

○湯川嘉津美・荒川智編著『幼児教育・障害児教育』(日本図書センター、2013年)。618ページ、6090円。辻本雅史監修『論集 現代日本の教育史』第3巻。

【事務局からのお知らせ】

1) 第10回大会

第10回大会の開催日・会場校(予定)が決まりました。2014年12月6日(土)、お茶の水女子大学です(準備委員長:小玉亮子理事)。詳細については会報第18号(6月発行予定)に掲載いたしますが、発表の申し込みなどは例年の日程が想定されます。ご準備ください。

2) 会費納入のお願い

本学会の会計年度は10月1日から翌年の9月30日までです。2013年10月1日～2014年9月30日の会費納入用の振込用紙を同封いたします。すでに納入いただいている会員は振込用紙を次回にご利用ください。次号の会報発送時には会費納入状況を確認のうえ、未納の方にのみ振込用紙をお送りします。

3) 会報原稿の募集

会報を通じて研究情報の提供と研究者間の交流に努めます。会員研究情報、新会員の自己紹介(全員の方にお願いしています)、海外幼児教育だより、幼児教育史研究への提言など

をお寄せください。文量は3000字程度で、メールまたは郵便で、なるべくデータを付けて事務局までお送りください。年2回の会報発行時までには届いた分を随時、掲載します。

4)名簿の作成と所属・住所変更届のお願い

春は異動の多い季節です。本学会の会報と機関誌はメール便を使っており、住所変更のご連絡がない場合はお届けできなくなりますので、必ずお知らせください。なお、昨年11月11日時点の最新の名簿に若干の誤りと変更がありました。今年の11月に発送予定の新しい名簿で訂正いたしますので、それまでお待ちください。

5)その他

6月頃の次号発送時と同時に、あるいは前後して、3年ぶりの役員(理事)選挙を実施します。詳細はその際にご説明します。

本号作成に際して榊理事と中村会員にご尽力をいただきました。心よりお礼を申しあげます。また、阿部理事が青山学院女子短大を退職されます。2年余り事務局を支えてくださったことに感謝いたします。(村知)

幼児教育史学会会報 第17号 2014年3月1日
編集・発行 幼児教育史学会事務局 村知稔三・阿部真美子
150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25 青山学院女子短大子ども学科気付
TEL:03-3409-7337/Fax:03-3409-3985
E-mail:admin@youjikyokushi.org/HP:http://youjikyokushi.org
郵便振替口座 00190-9-73668 幼児教育史学会